ツクシイバラの花のように

「氾濫に傷つくもなお立ち上がり　ツクシイバラはまた凛と咲く」

この短歌は昨年の夏に私自身が作ったものであるが、当時はこの短歌が後の私の変革を後押しすることになろうとは夢にも思わなかった。

全ては今年の夏の悪夢のような大地震から始まった。

身のすくむような激しい揺れの後、崩壊して変わり果てたふるさとが目に飛び込んできた。これは現実なのか。現実とはなんと残酷なのだろう、とその時思った。それからしばらくの間、何にも身が入らない日々が続いた。何をするにしても、心がついて来なかったのだ。

地震からしばらくたったある日のこと、部屋を片付けていて見つかった文芸誌をパラパラとめくっていると、くだんの短歌が目に留まった。この歌は地元球磨川のほとりに咲き、絶滅危惧種にも分類される極めて稀な野薔薇ツクシイバラについて詠んだものである。

遡ること６年前、球磨川流域を襲った大豪雨により、自生地一体は激しい濁流に呑まれた。さらに、どこからか流れ着いた巨大な漂着物で埋め尽くされるという甚大な被害を被った。しかし翌年の初夏、この花は傷つきながらも再び力強く鮮やかに咲き誇った。この出来事は、被災した人々の希望の光となった。

私は地域の環境保護活動に携わる中でこの奇跡の花の存在を知り、いたく感動して歌に詠んだのだった。儚く可憐な見た目とは対照的に、これまで数え切れぬほど厳しい大氾濫を幾度となく経験してきたことだろう。その度に立ち上がってきたのだ。しなやかに、気高く。
その短歌はまるで、過去の私から今の私への励ましのメッセージのように思えた。

数日後、所属している人権問題研究部の顧問から「避難所でボランティアを募集している」という連絡が入った。私自身被災以来ずっと、傷ついたふるさとのために何かできることはないだろうかと考え続けてきた。しかしもともとの慎重で臆病な性分が、私に囁きかけてくる。「普通は友達同士で参加するものなのかも」とか「他に高校生がいなかったらどうしよう」などである。その時弱気になりかけた私の背中を押したのは、紛れもなくあの短歌であった。ツクシイバラが困難な状況の中で立ち上がったように、私も今ここで勇気を出して立ち上がらねば、と。それが凛と咲くということなのだ、と。

当日一人で参加した私に、周りの大人たちが「一人でも参加してくれたんだね、ありがとう」と言葉をかけてくれた。誰かの役に立つということは、何と清々しいことか。震災以降、久々に心が晴れやかになった。

思っているだけでは、現状は何も変わらない。困難の中でも勇気を出して行動に移すことは確実にいまを変える力になっていく。

もう二度と、心に臆病風を吹かせはしない。失敗したっていい。何度だって立ち上がってみせる。そう、ツクシイバラの花のように。この夏が、私の変革の始まりである。